

英語授業内で異文化間能力を育むことについて — 大学生への実態・意識調査に基づく考察 —

印田佐知子

Abstract: This study seeks to determine how Japanese university students perceive intercultural learning in the English classroom, and to what extent they have received intercultural language education before entering university. Despite its necessity, research has shown that Japan falls behind in developing language learners' intercultural competence. However, various efforts by middle and high school teachers to incorporate intercultural learning opportunities into their daily classes have also been reported. In order to investigate the actual trend, a survey was conducted among 300 university freshmen to inquire what intercultural opportunities they had, and how they perceive the value and benefit of developing intercultural competence. The study concluded that the majority of students had opportunities to learn various non-inner-circle country cultures, which they could compare to their own culture and discuss how the differences could lead to misunderstandings and conflicts. However, opportunities to learn attitudes and practical skills to prevent or deal with communication troubles were limited although most students are eager to acquire them. Most students consider themselves unequipped with intercultural competence but believe it is necessary for surviving globalization, and are willing to develop it in the English language classroom.

Keywords: 異文化間言語教育、異文化間能力、国際語としての英語、実態調査

1. はじめに

グローバル化が加速する社会で、多くのビジネスやコミュニケーションが二国間から多国間へ、そしてインターネット上へと複雑性を増す中、英語は国際語として世界のさまざまな人々を繋ぐ重要なコミュニケーション・ツールとなっている。こうした現状を背景に、今日の英語学習者は読み書き聞く話す力ばかりでなく、多様な文化背景を持つ話者と円滑にコミュニケーションを図るための異文化間能力 (intercultural competence) を身につける必要があることは、多くの英語教育者が共有する認識となった。2017-2018 年告示の中学・高校の外国語指導要領解説にも、学習者が外国語の背景にある「文化に対する理解」を示し、コミュニケーションの相手に対して「配慮」しながら「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を身につけることが学習目標として挙げられている。これは、英語を使う際の相手の文化に対する知識と態度の重要性について言及したものであり、日々の英語の授業内で異文化間のコミュニケーションについて指導を行うよう文部科学省が求めたものと理解することができる。

教師も学習者も、グローバル化の現実とそれに伴う異文化間能力の必要性を多かれ少なかれ認識していると考えられるが、実際の英語教育現場ではどれほどその育成が行われているのだ

ろうか。近年の検定中学英語教科書には、学習者の異文化間能力を育成する要素はわずかしは見られないことがわかっている（印田、2010；栗原・中山、2015）。その一方で、中学・高校の英語授業における異文化間教育の実践報告も多数行われており、その総体的な実態は把握されていない。そこで、本研究では、中学・英語の英語授業における異文化間教育の実態と、それに対する学習者の意識を探るべく、大学一年生を対象にアンケート調査を実施した。大学入学までにどのような異文化間学習の体験があるのか、そもそも英語学習の一環として異文化について学ぶことに賛成なのか、また、今後も学習を深めていきたいのかを知ること、今後の異文化間言語教育（intercultural language teaching）の指針が得られると考えてのことである。

2. 研究の背景

2.1. 英語の多様性に関する指導

異文化間能力の重要性を理解するためには、まず、世界の英語使用の現実を認識することが必要である。今や世界の4人に1人以上が英語話者であり、日本人が英語を介して意思疎通を図ることになる相手は、ENLとして英語を使用する母語話者よりも、ESLやEFLとして英語を学習した非母語話者である確率が高い（Cook & Singleton, 2014）。英語を第二言語として使用するシンガポールやインド等のアウトター・サークルの国々では、発音・語彙・用法等においてそれぞれ独自性を持った英語が発達し、日本やインドネシアといった英語を外国語として学ぶエクспанディング・サークルの国々でも、多くの英語話者が母語の影響を受けながら英語を使用している。その現状は文部科学省も理解しており、現行の中学校の外国語指導要領解説にも、「特定の地域やグループの人々の発音に偏ったり」しない、「いわゆる標準的な発音」を指導することが多様な人々とのコミュニケーションを可能にすると記されている。ここでいう「標準的な」英語とは、主にアメリカ標準英語のことを指していることは周知のとおりである。

アメリカ標準英語をはじめとするインナー・サークル圏の英語を学習の規範とすることは否定しないが、それ以外の英語の存在を学習者に認識させることは、先述の「コミュニケーションの相手に対して配慮しながら、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を身につける上で役立つ。さまざまな英語に触れることで、学習者は、英語の規範は一つではなく、母語話者と同じように話すことよりも、多様な話者に理解されるように「配慮」をして英語を話すことが重要であることに気づく。世界の諸英語を繰り返し聞いた学習者は、「ニホン英語」でも十分にコミュニケーションが可能だという自信を育み、異文化間コミュニケーションに必要な「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を身につける可能性が高いことがわかっている（吉富、2015）。

多様な英語があるということを知れば、それだけ多様な文化背景を持った人々が英語を話しているということも容易く想像できるようになる。一般的に、どんなに流暢に英語を話せたとしても、英語を母語としない英語話者の場合、母語文化の影響を逃れてコミュニケーションを図ることは難しい。Hyde (1998) は、英語を母語としない話者同士がコミュニケーションを図る際には、英語の形態や機能の差異よりも、敬意の表し方や沈黙の意味といった文化的要素の方が誤解や衝突の原因となると述べている。多様な英語話者が、それぞれの文化規範や価値観に基づいてコミュニケーションを図っている今日の現状を認識し、異文化間能力の重要性を実感するためには、授業内でインナー・サークル国以外の英語に触れる機会を作ることが望ましい。

では、日本の英語教育の現場では、実際にどれほど英語の多様性が授業内で取り上げられているのだろうか。Matsuda (2009) が、全国の大学95校を対象に、英語教員を目指す大学生

が受講している英語科目の内容について調査を行ったところ、殆ど英米の英語しか教えられていないことがわかった。7割の大学が、英語教員を目指す学生ならば多様な英語に関する知識を持つことが「理想的」だと考えていながら、実際に学ぶことのできる科目は殆ど開講されていなかった。教材面での研究としては、筆者（2010）が中学の検定英語教科書および教師用指導書と視聴覚教材の内容を分析したところ、インナー・サークル国以外の人物や題材が教科書に登場することはあっても、学習者がアメリカ標準英語以外の英語を耳にする機会は皆無に等しいことがわかった。総体的に、日本の英語教育において、世界の諸英語を用いた教材は少なく、国際語としての英語の多様性について積極的な指導が行われている風潮は見受けられない。しかし、現場の教師が自らの判断で授業に導入しているケースもあることを鑑みれば、指導の実態は正確に把握できていない。今後、一貫した指導方針の検討やさらなる指導方法の共有が待たれるところである。

2.2. 異文化に関する指導

異文化間能力とは「異なる文化背景やアイデンティティを持った人間がやり取りをする際に、文化間を仲介しながら意思疎通をはかる能力」であると定義した Byram (1997) は、それを育成するための第一歩として、対象言語の文化を学ぶだけでなく、学習者自身の文化を顧みることが不可欠だと述べた。異文化間能力の育成方法は、これまでにさまざまな考えが示されてきたが、異文化を自文化と比較し、内省・分析することの重要性は多くの研究者によって唱えられている (Kramsch, 1993; Deardoff, 2006; Crozet & Liddicoat, 1999; 他)。具体例として、Liddicoat & Scarino (2013) は、異文化間学習は、教室内でのやり取り (interacting) の中で、言語と文化の関係性に気づき (noticing)、自文化と比較し (comparing)、自身に内在する文化を省みる (reflecting) というサイクルの繰り返しによって成立すると述べている。従来の英語教育では、インナー・サークル国の文化を受動的に学ぶことが多かったが、英語を国際語として学習する場合は、多様な英語話者の文化を学ぶとともに、学習者自身の母語と文化にも意識を向けさせ、相違点を見つけながら比較分析させることが重要である。

その際に大切なことは、目に見えない深層文化を十分に比較することである。Hall (1972) は文化を氷山に例え、異文化間コミュニケーションにおいて重要なのは、食物、工芸品、祭りといった海面上に表れている表層文化ではなく、海面下にあって表には見えにくい価値観、時間の概念、コミュニケーション・スタイル、意思決定方式などの深層文化であると述べた。深層文化は普段意識されていない部分であり、その文化の構成員にとっては当たり前すぎて気づきづらいため、異文化間コミュニケーションでは誤解や衝突の原因となる (石井・久米・遠山、2001; 八代・荒木・樋口・山本・コミサロフ、2001)。日々の英語授業において、こうした深層文化に意識を向けさせる方法としては、例えば、テキストや映画に登場する会話等を取り上げ、話の内容、主張や説得の仕方、身体接触の度合い等を自文化と比較し分析することが可能である。このような比較を通じて、学習者は自文化の文脈でしか通用しないコミュニケーション・スタイルや人間関係のあり方に気づき、異文化間で起こり得る誤解やトラブルを想像できるようになる。

さらに重要なことは、学習者に文化を固定的なものとして捉えさせないことである。多くの英語教材でさまざまな文化が取り上げられているが、そこで得た断片的な知識をもとに「この地域の文化はこういうもの」だと学習者に断定させないようにする必要がある。例えば、一般的に、アングロサクソン文化圏では、字義通りで曖昧さのないローコンテクストなコミュニケーション・スタイルが取られるのに対し、多くのアジア文化圏では、メッセージをほのめかして伝えるハイコンテクストなスタイルで意思疎通が図られることはよく知られている。しかし、

ひとつの文化圏の中にもさまざまな文化が混在している。ましてやグローバル化社会においては、一人の人間が幾つかの異なる文化間を移動してきた可能性もあり、地域や人種で文化的アイデンティティを判断することは難しい。今日の英語学習者は、文化を固定的に捉える「静的文化観 (static view of culture)」ではなく、文化は複雑で、状況やコミュニケーションの中で常に変化し続ける「動的文化観 (dynamic view of culture)」を持つことが不可欠である (Liddicoat, 2002)。文化に内在する多様性や動態性を考えずに、特定の国や地域の文化を単純に一般化することは、ステレオタイプ化や偏見を助長し、コミュニケーション上の問題を増幅させる可能性がある。欧州評議会が外国語教師を対象に作成したハンドブックには、「ステレオタイプや偏見は、理性よりも感情に基づくものであるがゆえに、学習者が教材等に登場する文化を批判的に捉え、分析する機会を作ることは第一の優先事項 (筆者訳)」 (Byram, Gribkova & Starkey, 2002) だと記されている。一般的な文化の相違を知ることは異文化間コミュニケーションに役立つが、個々の状況に臨機応変に対応し調整できる柔軟性を持つことが、今日の英語話者に求められている。

そして最終的には、異文化間のコミュニケーション・トラブルを防いだり対処したりするためには何が必要なのかを、学習者に考えさせることが大事である。異文化間能力の定義は多岐にわたるが、一般的に「知識」「態度」「技能」の三本柱から成り立つと考えられている (山岸、1995; Byram, 1997; Deardorff, 2006 など)。「知識」は、一般的に異文化と自文化に対する理解、文化の社会言語的な側面、文化がコミュニケーションに与える影響等を指しており、三本柱のうち、最も英語の授業内で指導されることの多い部分だといえる。しかし、知識だけでコミュニケーション・トラブルに対処することは難しい。自文化中心主義的な見方に捉われず、オープンかつ共感的に相手の話に耳を傾け、早急な判断をせず自分の考えを留保しようと努めるといった「態度」でコミュニケーションに臨むことが肝要である。これに加えて、共感的に傾聴したり、効果的に自分の考えを相手に伝えたりするためのコミュニケーション・スキル、誤解や摩擦が生じている状況を客観的に把握し、双方の立場から解釈を試みるといった対立管理スキル等の「技能」が身につけば、三本柱が揃うことになる。まずは、授業の中で、異文化間コミュニケーションにはどのような「態度」と「技能」が必要なのか、共に考える機会を設けるところから始めるべきだろう。

日本の中学・高校において、異文化に関する指導は、一般的に積極的に行われているとは考えられていない。中山 (2013) は、日本の英語教育では異文化間能力の育成はあまり実践されていないという理解を前提に、中学・高校の英語教師を対象に、異文化間能力の育成に関する全国的な意識調査を行った。その結果、多くの英語教師が「異文化理解を促す授業の実践に課題を抱えている」ことが明らかになった。実際、学習指導要領には、文化に関する指導の必要性は明記されているものの、具体的な学習到達目標は記載されておらず、異文化間能力とは何なのかという共通認識を英語教師間で図ることも難しい。先述のとおり、学習指導要領に基づいて作成される中学の検定英語教科書には異文化間能力を育成する要素が少なく、体系的な指導方法も確立されていないため、異文化に関する指導はそれぞれの教師に任されているのが実情である。しかし、授業に異文化間学習を導入している実践例も報告されており、関心の高い教師が工夫を凝らして指導を行なっていることもまた事実である。より体系的で実践的な異文化間能力の育成が全国的に行われるようになるまで暫く時間を要する可能性は高いが、前進させるためには、まず、現状をより正確に把握する必要があるだろう。

3. 研究の目的と方法

3.1. 研究の目的

本研究の目的は、日本の中学・高校の英語授業において、異文化に関する指導がどの程度、どのように行われているのか、また、学習者たちがその必要性をどれほど感じているのかを把握し、今後の指針とすることである。具体的には、以下の3点について検証することである。

1. 英語の多様性に関する指導と学生の意識
2. 異文化に関する指導と学生の意識
3. 異文化間能力に関する学生の意識

3.2. 調査の方法と内容

2018年度春学期に、高校を卒業して間もない東京都内私立大学2校の1年生男女300名を対象にアンケート調査を実施した。学生たちの専攻分野は、法学、経営学、現代心理学、コミュニケーション福祉学、スポーツ・ウェルネス学、食物学と多岐にわたり、敢えて英語や異文化間コミュニケーション学を専門としない学生を対象とした。回答者の英語力は、5割弱が英検2級程度、3割が準2級程度であった。

アンケートには、自分の中学・高校における英語の授業を振り返り、覚えている限りで最も自分の体験や考えに近い答えを選択・記入してもらった。16問の質問項目のうち、14問が選択（三者択一）式、2問が自由記述式であり、その回答を数量的・質的に分析し、考察を行った。以下が主な質問項目である。

1. 中学・高校の英語の授業で、アメリカやイギリスといった英語を母語とする国以外の英語に触れる機会はあったか。また、そのような機会は必要か。
2. 英語を母語とする国以外の文化を知る機会はあったか。また、そのような機会は必要か。
3. 他の文化（や言語）と自分の文化（や言語）を比較する機会はあったか。また、そのような機会は必要か。
4. 文化をステレオタイプ化する危険性について学ぶ機会はあったか。また、そのような機会は必要か。
5. 文化の違いがコミュニケーション上の誤解やトラブルを招くことがあることを学ぶ機会はあったか。また、そのような機会は必要か。
6. そうした誤解やトラブルを防いだり対処したりするための態度やスキルを学ぶ機会はあったか。また、そのような機会は必要か。
7. 自分には「異文化間コミュニケーション能力」が身についていると思うか。また、身につけたいか。
8. 多様な英語や異文化間コミュニケーションについて中学・高校で学んだ経験がある場合は、どのような教材・アクティビティを通じて学んだか。
9. 英語の授業の中で、多様な英語や異文化間コミュニケーションについて学ぶことについてどう思うか。

4. 調査結果と考察

4.1. 英語の多様性を学ぶことについて

中学・高校の英語の授業で、多様な英語、つまりアメリカやイギリス以外の英語に触れる機会有ったかを尋ねる問いに対して、71%の学生がその機会は「なかった」と回答した。これ

は、2.1. で述べた先行研究の結果と一致しており、予想通りということができよう。

また、こうしたインナー・サークル以外の英語に触れる機会の必要性について尋ねたところ、35%の学生が「必要」、48%の学生が「理想的だが必要ではない」、17%の学生が「必要ない」と答えた。このことから、英語の多様性を知る機会はこれまであまり無かったものの、そのことに対する大きな不満はなく、そのような機会はあった方が良いものの必須ではないと考えている様子が窺える。

しかし、インナー・サークル以外の英語に触れる機会が多少でも「あった」3割弱の学生に焦点を絞って見てみると、触れる機会が「なかった」7割強の学生よりも、そうした機会の必要性を強く感じていることがわかった（図1参照）。これは、いわば「正統派」以外の英語の特徴や訛りに実際に触れたことのある学生ほど、通常、授業で聴いている英語との違いを実感し、有意義な体験だったと評価している可能性が高いことを示唆している。こうした経験が、異文化間能力の必要性を認識することに直接繋がったかどうかは図りかねるが、多様な英語に触れたことが学習者に肯定的に受け止められていることは読み取れる。

図1 英米以外の英語に触れる機会の必要性

	必要	理想的だが必要ではない	必要ない
触れる機会があった学生(87名)	61%	30%	9%
触れる機会がなかった学生(213名)	24%	56%	20%

4.2. 異文化を学ぶことについて

4.2.1. 学習内容とその必要性

中学・高校の英語の授業で、英米を中心とするインナー・サークル以外の文化を知る機会があったかどうかを尋ねたところ、「はい」「時々」を合わせて67%の学生が「あった」と回答した。さらに、そうした異文化（と言語）を自文化と比較する機会があったかどうかを尋ねたところ、「はい」「時々」を合わせて77%の学生が「あった」と回答した。このことから、インナー・サークル以外の文化を知識として享受するばかりでなく、自らの文化も内省し比較する機会が英語の授業内にあったと認識している学生が多いことがわかる。加えて、74%の学生が自文化と比較することは必要だと考えていることから、多くの学生が自らの経験を経て、比較することの重要性を感じていることが窺える。

先述の中学検定英語教科書の分析結果（印田、2010；栗原・中山、2015）によれば、英米以外の文化が教科書の題材として取り上げられることはあっても、自文化との比較を促す演習問題等は教材の中に殆ど存在しない。多岐にわたる高校の英語教科書に関しては詳細が明らかになっていないが、今回の調査結果から、教材に異文化間能力を育成する要素が少なくても、教師が題材を用いて自ら学習者に比較を促している可能性が高いことが推察される。

次に、英語でコミュニケーションをする際に、文化の違いが誤解やトラブルを招く可能性があることを学んだかどうかを尋ねたところ、「はい」「時々」を合わせて7割強の学生が「あった」と答えた。さらに、9割近くの学生が、そのような学習の機会は「必要」だと答えた（図2参照）。このことから、英語を使う際には、相手との間で誤解や対立が生じ得ることを理解しておくことが重要だと学習者も考えており、そのことを学ぶ機会を得たことに満足していると言えるだろう。

一方、学生が不満に感じているとするならば、さらに踏み込んだ実践的な異文化間学習の機会の少なさといえよう。特定の国や地域の文化を一般化したり、ステレオタイプ化したりすることの危険性について学んだかどうかを尋ねたところ、56%の学生が学ぶ機会が「なかった」

と回答した。しかし、73%の学生が学ぶ必要が「ある」と答えていることから、この点に関しては需要と供給が一致しているとは言い難い（図3参照）。また、誤解やトラブルが生じる可能性について知るだけでなく、そうした対立を実際に防いだり対処したりするための態度とスキルを学ぶ機会があったかどうかを尋ねたところ、「あった」学生と「なかった」学生がほぼ半々の割合で存在した。但し、学ぶ必要については8割以上の学生が「必要」だと考えており、学習に対する意欲に比べて、実際に学ぶ機会が少ないことがわかった（図4参照）。

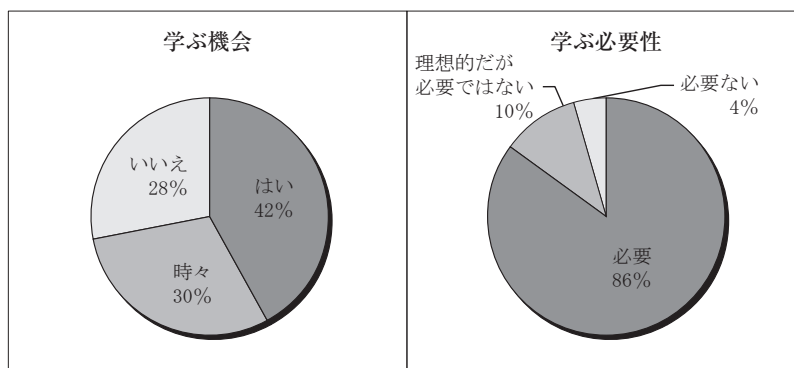


図2 文化の違いが誤解やトラブルを招く可能性について学ぶ機会

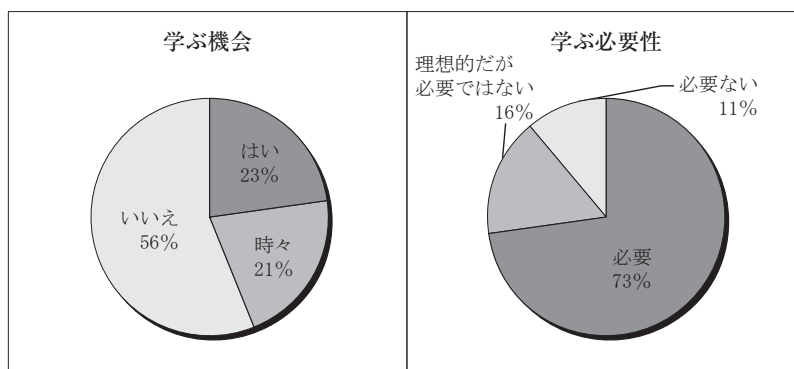


図3 ステレオタイプ化の危険性について学ぶ機会

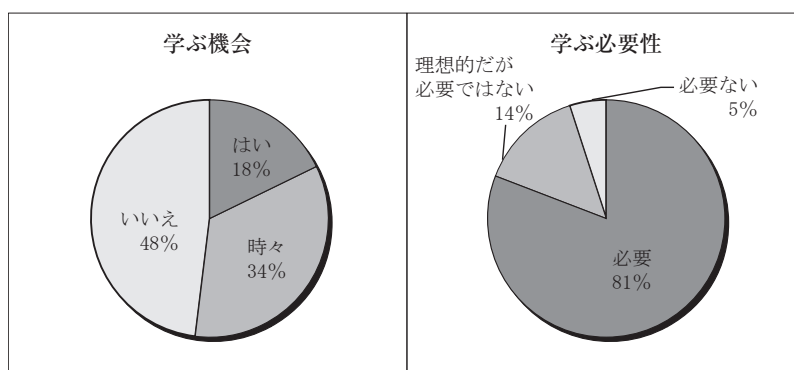


図4 誤解やトラブルを防いだり対処したりするための態度・スキルを学ぶ機会

4.2.2. 異文化間能力の習得について

現在、自分に異文化間能力（調査票では、学生が聞き慣れている「異文化コミュニケーション能力」という用語を使用した）が身についていると思うかどうかを尋ねたところ、「はい」「まあそう思う」と答えた学生が合わせて3割強、「いいえ」と答えた学生が7割強を占めた。また、今後「身につけたい」と考えている学生は「はい」「まあそう思う」を合わせると94%に上り、「身につけたくない」学生は6%（300名中17名）のみであった（図5参照）。このことから、多くの学生が現在は異文化間能力を身につけていないものの、その習得を望んでいることがわかった。

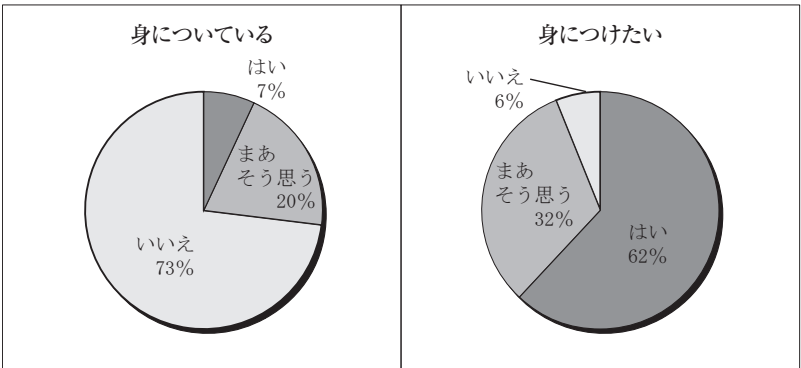


図5 異文化間能力の習得について

特筆すべきは、身についているかという問いに対して「はい」と明確に回答した7%（22名）の学生は、すでに身につけていると自負しているにもかかわらず、全員が今後さらに「身につけたい」と回答したことである。その一方で、「いいえ（身につけていない）」と答えた学生73%（218名）のうち、今後も「身につけたいと思わない」学生が17名いた。そこで、この「身につけており、今後も身につけたい」22名と、「身につけておらず、今後も身につけたいと思わない」17名を、対極的な2つのグループとして比較した。すると、いずれの調査項目においても、前者グループの方が後者グループより異文化に関する学習の経験値が高いことがわかった。特に、英米以外の文化を学ぶ機会、ステレオタイプ化の危険性を知る機会、誤解やトラブルを防いだり対処したりするための態度・スキルを学ぶ機会は、「身につけており、今後も身につけたい」学生の方がはるかに多く経験している（図6参照）。サンプル・サイズが小さいことや、異文化間能力の定義の共通化を図っていないことから断言することは難しいが、以上のことから、異文化の学習経験が多ければ多いほど、異文化間コミュニケーションに対する自信がつき、さらにその力を高めたいというモチベーションの向上に繋がる可能性が高い。

図6 異文化に関する学習経験と異文化間能力

	身につけており、 今後も身につけたい(22名)	身につけておらず、 今後も身につけたくない(17名)
英米以外の英語に触れる機会	55%	11%
英米以外の異文化を知る機会	95%	41%
異文化と自文化を比較する機会	90%	71%
ステレオタイプ化の危険性を知る機会	90%	35%

文化の違いが誤解やトラブルを招く可能性について学ぶ機会	86%	66%
誤解やトラブルを防ぎ、対処するための態度やスキルを学ぶ機会	90%	50%

4.2.3. 学習方法

中学・高校時代に、英語の多様性や異文化間コミュニケーションについて学んだ経験がある場合は、どのような方法で学んだのかを尋ねたところ、69 名による回答（自由記述式）があった。結果は、大きく分けて 1) 英語授業内の学習を通じて、2) 教師の話を通じて、3) 異文化との直接的な接触の 3 つの方法に纏めることができる（図 7 参照）。

英語の授業内では、教科書を中心とするリーディング教材や、ビデオや映画といった視聴覚教材による学習が最も多く、続いて、ディスカッションや調べ学習を行ってからプレゼンテーションやレポートとして纏めるケースが多かった。先述の中山（2013）が行った中学・高校英語教師に対する調査結果によれば、教師が「今後、実際に行えるだろう」と考えている指導方法は、「異文化への気づきを促す文章・教材・活動を選ぶ」と「インターネット等を用いて英語使用者の文化などについて調べ学習を支援する」が最も多かった。これらの指導方法と、今回学生たちが経験したと述べた学習方法はほぼ一致しているといえる。

教師の話を通じて学んだ事例としては、授業中に日本人の英語教師が「自分が体験した異文化での勘違い」、「世界でやってはいけないうェスチャー」、「地域によって異なる英語の発音」等について話してくれたり、「外国人の知り合いを連れて来てくれた」りした体験が記されていた。これらの記述は、他の学習方法の説明と比べて具体的で長い文章が多く、学生たちの印象に強く残っている様子が窺えた。また、授業の内外で ALT の外国人教師の話を書いたり、単発的な外国人講師による講義を受けたことで、直接的に「英米とアジア系の英語の違い」を耳にしたり、「出身国の文化」について学んだ学生も多かった。

一方、実際に異文化に身を置いたり、外国人と直接交流をしたりすることで学習したと考えている学生も多い。学校を通じて海外留学や語学研修に参加し、「ホームステイ」を体験し、「現地の学生と交流」したことで英語の多様性や異文化について学んだと述べた学生が多かったが、海外へ行かずに日本を訪れている留学生との交流を通じて学んだという学生も複数名いた。

図 7 英語の多様性と異文化コミュニケーションについて学んだ方法

学習方法	件数
【英語の授業内】	
リーディング教材(教科書、プリント等)	15
視聴覚教材(ビデオ、CD、映画、音楽等)	11
ディスカッション、発表、レポート	8
その他の授業内アクティビティ	3
【教師の話】	
日本人英語教師の話	7
外国人教師の話(ALT、講演会の講師等)	13
【異文化との直接的な接触】	
海外留学・語学研修・修学旅行	12
日本に来ている外国人留学生との交流	7
【その他】	
英語以外の「異文化理解」の授業	3
独学(新聞、本、SNS 等)	3

4.3. 英語の多様性と異文化間学習に対する考え

英語の授業内に、英語の多様性や異文化間コミュニケーションについて学ぶことについてどう思うかを尋ねたところ（自由記述式）、アンケート回答者 300 名の 58%である 175 名による記入があった。その 9 割近く（156 名）が、英語の授業内に英語の多様性や異文化間コミュニケーションに関する学習を推進すべきだという肯定的な考えを示した。以下にその詳細を記す。

4.3.1. 「賛成派」の意見

記入者全体の 89%を占めた 156 名の「賛成派」の意見を纏めると、英語の多様性と異文化間コミュニケーションについて学ぶべき主な理由は、1) グローバル化が進むこの時代には必要なことであり、2) 自分の将来に役立つとともに、3) 自身の人間的成長も期待できるから、であった。その根拠となった記述の中から、代表的なものを以下に抜粋する。

[グローバル化時代には必要]

- ・自分たちがグローバルに活躍していくためには欠かせない。
- ・グローバルな社会に適応していくために必要なスキルであることは間違いない。
- ・国際化が進む中、自分たちと異なる考え方や文化を受け入れようという姿勢に繋がる。
- ・特定の言語や文化について色眼鏡なしで寛容になれるなら、それは今の日本人に最も必要なこと。

[実用的である]

- ・中学・高校の英語の授業は文法的なことばかりで正直つまらない。多様な英語や異文化コミュニケーションについて学ぶのは実用的で良い。
- ・大学受験のスキルや読み書きを教えるより、コミュニケーションを円滑に行う術を教える方が実用的で良い。
- ・社会に出たら多くの訛り等を含んだ英語に出会うだろうから、今の段階から触れておけば実践に役立つ。
- ・英語がわかれば英語を話す人とコミュニケーションが取れると思っていたが、実際に海外に行ってみたら、英語なのにわからないことが多かったので現実的に必要性を感じている。

[人間的な成長が期待できる]

- ・多様な英語を知っていたり異文化について詳しくれば、それが強みになるし、交友の幅も絶対に広がる。
- ・自分の価値観を変えるきっかけになる。
- ・自分の視野を広げるうえで役立つ。

4.3.2. 「慎重派」と「反対派」の意見

一方、英語の多様性や異文化間コミュニケーションについて学ぶことは重要だが、問題点もあると考える「慎重派」も 10 名（記入者全体の 6%）いた。その理由としては、1) 現状ではその余力がない、2) 英米の英語を学ぶことが先決、3) 学んだことを有効活用できない可能性があることが挙げられていた。

1) は、受験を控えた中学・高校の英語授業では「基礎的な英語学習で手一杯」で、「ただでさえ学べるのが限られている状態」なため、余分なことまで学ぶ「時間の余裕」がないだろうという考え方である。また、2) は、「私たちは英語圏の人間ではない」ので、まずは「英米

の英語の知識や文化を学ぶこと」を優先すべきであり、手広く学ぶ必要はないという考え方である。そして、3) は、異文化について学んだとしても「その知見を客観視する能力がなければ、振り回されるだけ」であり、「学び過ぎても〈自分とは違う〉と排他的になってしまう」可能性や、「教えたところで学生たちが実際に異文化を理解し配慮するのか」疑わしい等、学ぶことに対する疑念が記されていた。

最後に、少数ながらも、英語の多様性も異文化間コミュニケーションも学ぶ必要はないと記した「反対派」6名（記入者全体の3%）の学生は、英語の授業では英語の「基礎」を学ぶべきであり、教えるならば「別の授業を設けるべき」等、その殆どが英語科目で教える内容ではないという考えを示した。

5. まとめ

本研究で明らかになったことは、まず、大多数の大学生が異文化間能力の習得を望んでいるということである。今後グローバル化社会を生き抜く必要のある彼らは、英語の4技能だけでなく、異文化間能力を習得することの重要性を想像以上に実感している様子が調査結果から窺えた。多くの生徒が受験を控えている中学・高校レベルの英語教育では、一般的に異文化に関する指導は積極的に行われていないと考えられているが、今回の調査で、多くの学生が英語の授業内に異文化に関するさまざまな指導を受けてきたと回答した。授業では、アメリカやイギリスといったインナー・サークルの文化だけでなく、英語を母語としない国々の文化について知る機会も多く、それらを知識として享受するばかりでなく、自文化と比較し相対的に理解を深める機会も多かったと学生たちは認識している。さらに、文化の違いがコミュニケーションを図る際に誤解やトラブルを招きかねないことも学び、このような学習の機会があったことを多くの学生が肯定的に受け止めている。

しかし、異文化間コミュニケーションを行うための実践的な能力の育成という点では、学生たちが望んでいるほど授業で学ぶ機会がなかったようである。多くの学生が、異文化をステレオタイプ化することの危険性や、誤解やトラブルを防いだり対処したりするための態度とスキルを学びたいと考えているにも拘わらず、実際の授業ではこうした内容の指導は積極的に行われていない。大半の学生が、自分には異文化間能力が身についていないと考えており、その多くが習得を望んでいる。そして、その指導が英語の授業内に行われることに賛成していることがわかった。

今回の調査結果は、より多様な英語に触れ、より異文化間学習の経験が多い学生ほど、その意義と重要性に気づき、さらに学習を深めたいと望む傾向が強いことも示唆した。これを受け、英語教師は、日々の授業の中でいかに異文化間能力の育成を図っていくべきなのかを真剣に考える必要があるだろう。中学・高校で異文化について学んだ方法として挙げられたのは、教科書を中心としたリーディング教材と視聴覚教材、日本人と外国人の英語教師による体験談・講話、語学留学や海外研修などの実体験の主に3つであった。留学や研修に全ての学生が参加できるわけではないことを鑑みれば、良質な教材と、経験と知識の豊富な教師の役割の大きさが理解できる。

大学における異文化間指導の実態は把握できていないが、現状において中学・高校で実践的な異文化間能力の育成を行うことが難しいのであれば、大学英語教育でそれを補う必要があるのかもしれない。今後は、日本の教育制度や、小学校から大学までの学習者の発達段階を視野に入れ、段階的な異文化間指導のあり方を検討すべきだろう。学生たちの希望する、より実践的な異文化間能力の育成に向けて、どうすれば本来の英語学習の妨げとならずに効率的・効果

的な指導ができるのか、英語教育者のみならず、異文化間コミュニケーションの研究者等とも手を携え、教材のあり方、教員研修、指導方法等の研究が一層進展することに期待したい。

参考文献

- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Byram, M., Gribkova, B. & Starkey, H. (2002). *Developing the Intercultural Dimension in Language Teaching: A Practical Introduction for Teachers*. Strasbourg: Council of Europe.
- Cook, V. & Singleton, D. (2014). *Key Topics in Second Language Acquisition*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Crozet, C. & Liddicoat, A. J. (1999). The Challenge of Intercultural Language Teaching: Engaging with Culture in the Classroom, In J. Lo Bianco, A. J. Liddicoat & C. Crozet (Eds.), *Striving for the Third Place: Intercultural Competence through Language Education*. pp.113-126. Canberra: Language Australia.
- Deardorff, D.K. (2006). The identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization at institutions of higher education in the United States. *Journal of Studies in International Education*. 10, 241-266.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. New York: Anchor Press.
- Hyde, M. (1998). Intercultural competence in English language education. *Modern English Teacher*, 7(2), 7-11.
- 印田佐知子 (2010) 「英語教育における異文化コミュニケーション能力の育成—中学英語教科書の内容分析—」『目白大学人文学研究』第6号 pp.163-180.
- 石井敏・久米昭元・遠山淳 (2001) 『異文化コミュニケーションの理論』有斐閣
- Kachru, B. B. (Ed.) (1992). *The Other Tongue: English Across Cultures, Second Edition*. Champaign: University of Illinois Press.
- Kramsch, C. (1993). *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- 栗原文子・中山夏恵 (2015) 「中学英語検定教科書に見られる異文化間コミュニケーション能力—『言語と文化の復元的アプローチのための参照枠』を用いた分析を通して」『Language Teacher Education 言語教師教育 2015』JACET 教育問題研究会 pp.41-58.
- Liddicoat, A. J. (2002). Static and dynamic views of culture and intercultural language acquisition. *Babel*, 36(3), 4-11.
- Liddicoat, A. J., & Scarino, A. (2013). *Intercultural Language Teaching and Learning*. New York: Wiley-Blackwell.
- Matsuda, A. (2009). Desirable but not necessary? The place of World Englishes and English as an international language in English Teacher Preparation Programs in Japan. *English as an International Language: Perspectives and Pedagogical Issues*. Channel View Publications, pp.169-189.
- 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説：外国語編』開隆堂出版
- 文部科学省 (2018) 高校学習指導要領解説：外国語編・英語編 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfi

le/2018/07/13/1407073_09.pdf

中山夏恵 (2013) 「第 4 節 異文化能力の育成についての意識調査」『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』JACET 教育問題研究会

山岸みどり (1995) 「異文化間能力とその育成」『異文化接触の心理学』(渡辺文夫編著)、pp.209-223 川島書店

八代京子、荒木晶子、樋口容視子、山本志都、コミサロフ喜美 (2001) 『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社

吉富朝子 (2015) 「世界の英語変種と第二言語語用論に対する意識を高めるための統合型言語学習のすすめ—国際英語のコミュニケーション能力を養うために」『コンピュータ&エデュケーション』第 39 号 pp.26-31.

